

日本海における沖合底びき網漁業（1 そうびき）によるアカムツの漁獲状況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 佑太, 上原, 伸二, 井関, 智明 メールアドレス: 所属: 日本海区水産研究所
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2013254

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



日本海における沖合底びき網漁業(1そうびき)によるアカムツの漁獲状況

○八木佑太・上原伸二・井関智明(日本海区水産研究所資源管理部)

はじめに:

アカムツは、西太平洋に分布する暖海性種で、主に底曳網によって漁獲される水産有用種である。日本海区水産研究所では、日本海北部におけるアカムツの資源診断手法の開発に向けて研究を開始した。本報告では、日本海における沖合底びき網漁業(1そうびき)によるアカムツの漁獲状況を整理し、漁獲量と資源量指数の経年および季節変化から資源の状況を把握する。

材料と方法:

1. 1988年から2010年までの日本海区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計調査資料を用いて、漁獲量とひき網数を漁区別(図1)、月別、年別に集計し、CPUEと資源量指数を次式により算出した。

・CPUE=月の漁区別漁獲量/月の漁区別ひき網数
 ・資源量指数=漁区別CPUEの総和
 2. 漁獲量と資源量指数の季節変化をみるために、水温の変化を考慮して、1-3月を冬期、4-6月を春期、9月を夏期、10-12月を秋期として集計した。

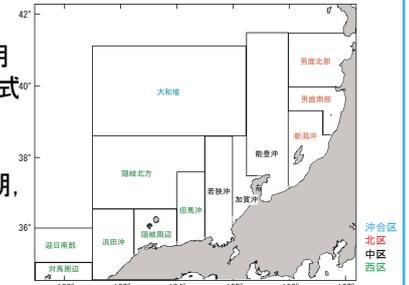


図1. 日本海区の沖合底びき網小海区分

結果①: 経年変化

漁獲量は、1997年以降に増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2010年で最も多かった(図2)。資源量指数についても漁獲量と同様の変動傾向であった。

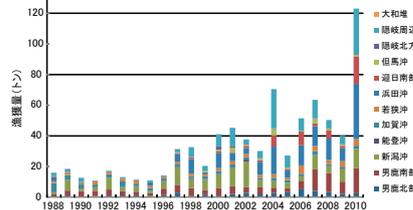


図2. 小海区別の漁獲量の経年変化

海区分に資源量指数をみると、1990年代後半以降に浜田沖及び隠岐周辺において数値の増加が顕著であった。また、比較的高い数値を示した北区の新潟沖では2-3年周期で増減を繰り返しており、資源量指数の変動パターンは漁区ごとに異なっていた(図3)。

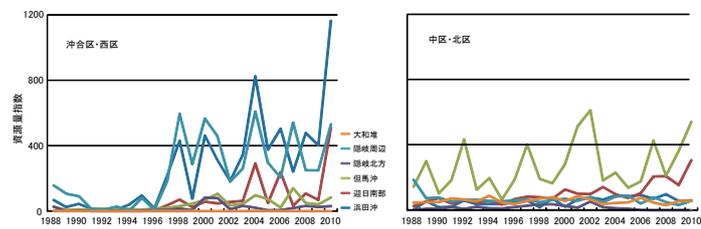


図3. 小海区別の資源量指数の経年変化

結果③: 季節変化

資源量指数は、いずれの漁区においても夏期に高い傾向がみられた。西区では夏期にのみ、中区と北区では特に夏期と冬期に年変動が大きかった(図5)

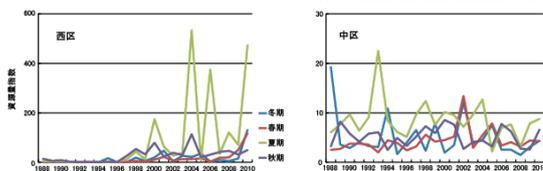


図5. 中海区別の資源量指数の季節変化

結果②: 漁場分布

漁場分布を概観すると、漁場は西区と北区で多く、中区の若狭沖と能登沖では少なかった(図4)。漁獲量が増加し始めた1990年代後半以降では、特に西区において広範囲に漁獲が認められるようになった。

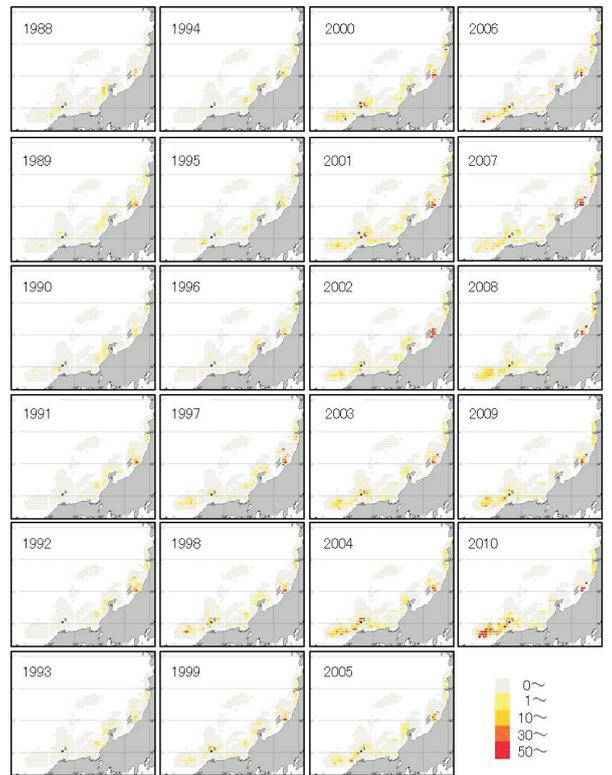


図4. 日本海区におけるアカムツの漁場分布図(資源量指数)

まとめ:

日本海における沖合底びき網漁業(1そうびき)によるアカムツの漁獲量及び資源量指数は全体的には増加傾向にあるが、その変動パターンは漁区によって異なっていることが分かった。近年の水温上昇は、暖海性種であるアカムツにとって好適な生息環境の拡大につながっている可能性がある。